

アシンメトリー

多田龍介

◆ 目次

夏の夜に	5
実るほど頭を垂れる	6
蝉の一分	8
間違いだらけの僕たちを	10
けもの道	12
騒がしい沈黙	15
社会通念	18
醸すには	20
まだできること数えて	22
また酔ってしまう前に	24

眠れる獅子	26
ある記録	28
アナーキーインJP	30
鉄鎖	32
ままよ	34
オートマタ	35
英雄夢想	36
写真は添えるだけ	38
アシンメトリー	40
昔、カリブで	42
あとがき	45

夏の夜に

話を盛りたがる人たちがいて
帳尻を合わせなければなくなる現場がある

あの病院の中では今までも今も
んごいことがなされている

のを知っている身としては
正しいことがなされているとは言えない

実るほど頭を垂れる

スポーツ好きなら楽しまなきゃ損ですとラジオの声
スポーツ好きじゃなかった

見なくても大体知ってます
ニュースは読みますからね

すさまじいものですよ、もう頭を低くしているしか
流れ弾に当たる、匍匐^{ほふく}前進だ

こんなとき詩の書けるものか
ここで書けなきゃ詩人なんか

という気持ちで選手も臨むことでしょう
ああ、僕ら余剰できていた

自由も平和も平等も

プリンの上のカラメルの如き物だったなんてそんな

おっと頭が高かったようだ

スパーンッ

I thought my life is seen and listened. Wiretapping for a along time.

Against this, I talked to wall. Did it work? Yes probably.

Big effect and confusion to world and it ruined my life so I choose silent again.

Will it work? Maybe. Who, why? I don't care.

僕は君、ただのニートじゃないよ

来る日も来る日も懸命に働いてきたよ

地球防衛とか自宅警備とか

.....

五輪に対する僕のつぶやきは

そういう斟酌をもう放棄して

一個の人間として発言するという

発露を示している



間違いだらけの僕たちを

鶏もも肉の照り焼きを焦がしてしまった
照りというか焦げですな

完璧でないことを

受け入れなきゃいけない

老いた父母などにまでは手は及ばない
人のこととなるともうどうしようもない

完璧でないことを

受け入れなきゃならない

オリンピックは準備不足
というか警戒はザルだそうだ

完璧でないことを

といって墮落の限りを尽くされても困る

でもいいと思うんですよ

でたためであることが周知徹底されて

かくなる上はデストロイですか？

捨て鉢にならないことだ、苦しくとも

けもの道

一時間早く起きる人は不機嫌なんだって

一時間椅子に座ってる人は

寿命が何十分縮むんだって

縮んだ分も含めて寿命というんじゃないでしょうか

しかも教えて下さるのが精神科医のお医者さん

ヤブ医者の類なのだ

うむ、誰の指図も受けない

あんまり危ないことしちゃいけないと思うんですよ

先生に逆らった？

それは危ない

度が過ぎれば一発病院送りレッドですよ

男に意見した？

それは危ない

腕力に物言わせて殴られたりしたら

赤子が生まれた？

それは危ない

末法の世でどんな災難に遭うか

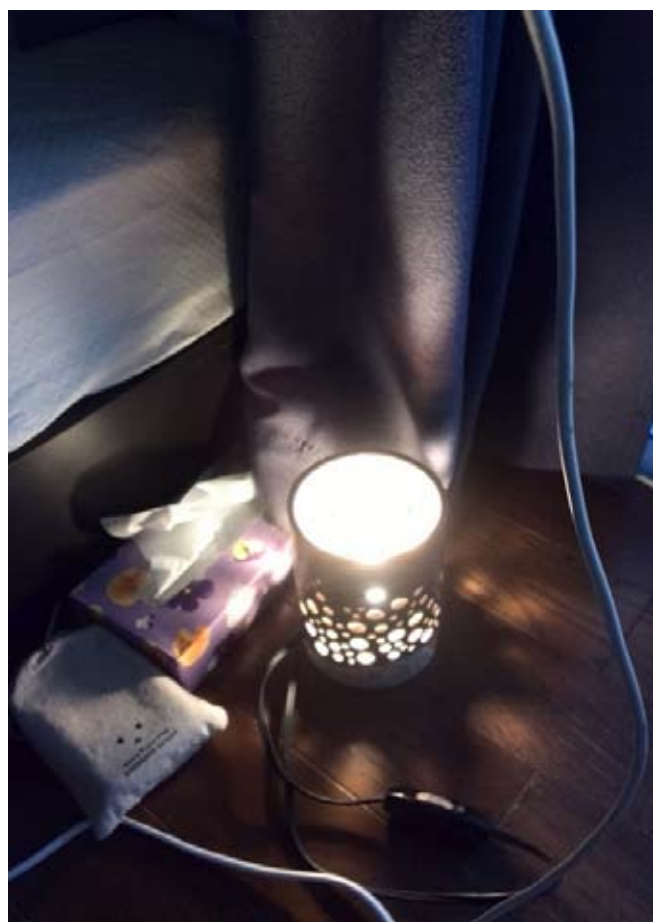
こうして生まれないのが一番良いという結論に……
どこかに間違いがあるはずだ

相手の刃を見据えながら

自分の生存権を主張していかねば

悪いことばかりでもない

悲惨の中にも幸せを見る僕もいる



騒がしい沈黙

子を産めない僕は代わりに詩を書き
生命の創造

不平を言うのが仕事です
どうしたら満足かわかってない

これは難しいことだよ
要求に際限がない

僕は満足してるので
そうでしょうね、三食昼寝付き飲み放題ですもんね

僕の解決方法は万人向けではなく
飢える者に届く言葉は持たず

名聲は息をつかせるかもしれないが
それもつかの間で

喧騒がバランスを崩させるのだ
批判する者の荷は軽やかだ

書きまくってやればいいんですよ
各々それぞれの立場で

そして誰も他を聞かない
世はすべてこともなし

* ロバート・ブラウニングの言葉



社会通念

頑張るしかない、悲しい
そうなんだ、かかってる

頑張りすぎちゃったのねえ
よゝし、もう頑張らないぞ

社会はゝしかないでできている
と、しがないヒキコが言ってみる

十戒を見る

してはならぬのオンパレードではないか

特にそういう取り決めはなくても
ないんだ、ない

そうか、君は飛ぶのか
僕は歩こうと思う

醸すには

ランボオは『地獄の季節』の中で

「俺は架空のオペラ^{＊1}となった」と書いた

そして晩年の手紙の中では

「人生は茶番^{＊2}ではない」と書いている
この距離は長い

楽しかったね、楽しかったね
今度はずっと楽しくしようね

って楽しくなんかないわあゝとの声
君がイキるとき、誰かが萎えている

しかし僕らはイキらねば
もとい、生きねば

僕が獲得したものは
僕のものだよ、余裕があるよ

生命力の蛇口を閉じた
が、ガスは迂回してどこから吹き出す

また吹き出さねば
自家中毒を起こしその身を滅ぼすだろう

というわけで詩を書いている

- *1 『地獄の季節』ランボオ作 小林秀雄訳 岩波文庫 一九三八・八・五第一刷 39 頁
- *2 同右 121 頁

まだできること数えて

ある人が何であつたかというのは
その人がいなくなる時にわかるという

もしくはその能力が失われるときに

僕は命の前に失うことのできる能を持つている

ではやめてみますか、とログインできないとな
僕が精神に不調をきたしちゃうじゃないの

バンバン、垢バンバンなんて

そんなひどいこと、気軽にしちゃいけないって

いいんですか、パンとサーカスを一手に担う
僕を締め出すだなんて

けれど静かになったら僕の心の負担も減って
何がどうなるか見てみましょう

大切なのは肯定することじゃないよ
絶縁状を突きつけることだよ、きみ

また酔ってしまう前に

人間は大きく二つに分けると死ぬと読み
なるほどと感心した、股裂きか

教科書はいい読み物よ、辞書もまた
亜流の前に正統を知ろう

権威が嫌いな方もいて
学校では教えてくれないこともまあある

映像作品に焚きつけられて軽挙妄動しても
誰も助けてくれない、薄情世界

光の中を進めばいい
不条理があっても

やめたらいいのにやめられない
五輪じゃないよ、僕の酒

眠れる獅子

僕は拷問の憂き目を知っている

反抗しないから悪くなったと言われても

扇動し南無三なことになったら

親御さんに申し訳が立たないんですよ

心は簡単に折れる

ポッキーよりもたやすく

相手の刃の切っ先を見据えて踏み込む

ならいいがそうじゃないだろう

どこへ導こうというのか

こんなことはやめて家に帰れ

なぜ勇気を振り絞ってしまったのか
母の胸にごねているのが一番よい

という心境に至ってしまったても
命を盾に僕が戦っておられる

無理なら人に投げればいい
パスでもいいし、自走でもいいし

ある記録

解決策を与えるものではない

また何かの行動を推奨するものでもない

溺れる私が溺れるさまを記録しただけの
心の慰めで

また他の溺れる者にとつても

慰めになるかもしれない

こうして河童かっぱの川流れは記録され

貴重な研究対象へと、ならなかったかな

辛いとき一人だと思つたらやってけない
また辛いと言えもしなければもつと辛い



アナーキーインJP

僕が文句を言うのと

みんなが文句を言いだしてしまうかもしれない
みんなという言葉の愚劣さを承知していながら
そう、みんなが見んなど

そうかもしれませんね

じゃあ僕は一人その力学を知り仏のような顔で
いられるかーとしょっちゅう切れ

しょっちゅうではない

焼酎だ

酒と放蕩ほうとうに身を沈め、不正を見逃すことですか
怒ったらいじやないですか

誰もがいずれ気づきます

まったく付き合う必要のないでたらめに
付き合わされてきたと

幻想を打ち壊してどうなったかというと
何のことはない、前より悪くなったので
こうなれば疲えちゃったとつぶやいて
痴呆のように、僕は行きたい

鉄鎖

うまいこと言いたいとか
いらんこと言わないとか
あまり気にしなくなつて

うまいこと言えないし
いらんこと言つちやうし

自由でいいんじゃないかな
各々そんな感じだから
当然まとまらず

まとまらない感じ好きだな
これで目標に向かつて一致団結とかだつたら
もっと危機感持つちやつてたな

いつだって拒否権はある
と作品に書かれるとき
あまり拒否権がないのだ

それでも抗い試し選んでいく
この鎖の中で

ままよ

簡単なことなど一つもなかった

そこを簡単に見せているのがこのドラ息子である

難しいことは易しくなんて志向するから

もつところ、重厚に行けませんかね

いいですね、いいですねもいいですけどね

今いいかどうか分からないところを歩いてるんですよ

あえてそのものの名を呼ばぬところに

詩情が生まれる

直接批判できないときに時間や場所をそらし描く

オブジェクトに包まれ……とらんわ、そのものずばりじゃ

オートマタ

胆力を發揮せよとはご無体な。胆石できそな僕が言っても

こやつらがもう泣かなくていいように、道化てみたらよけい怖いと

健常者と共に行きたいどこまでも、わけわからんのがとにかくいやで

選択の重荷などには耐えられぬ。庶民たる僕オートマタなの

苦しくて誰をか殴り飛ばしたく、誰を殴ればいいのかわからぬ

英雄夢想

たとえば電車待ちをしているときに飛び込む人がいたとして
僕は英雄的には振舞えないでしょう

車内に凶刃を振るう者が来たとしても同様に
何なら我先に逃げ出すかもしれません

逃げたらいいじゃないですか

大丈夫だよ、僕スッパマンみたいに振舞うよ

ただそんな想定をして生きることが健全なことだとは思えないのです

悪と戦う義人の人は他にやりようがないからそうするので
戦いたがっているようではないかん

各々が持ち場で試行錯誤を繰り返し、最善を尽くしている
という体で、今日も頑張ろうかな

写真は添えるだけ

僕は十九で入院した折、この世の一切を放棄していた
にしては享樂を極めたその後よ

身体に異物を入れることには慎重であるべきだ
もう異物を入れ続けてきたので知らない

藥を打ちあんなに安心する母がいて
打たねばならぬでこんなに不安な僕がいる

面白いものですね、人とは
これについては他の人にどうこう言わない

カレーなら喜んで二度喰うのだが
儂はからげな香りよ



アシンメトリー

焼酎お茶割り三、四杯
もう決まっちゃう

大抵のことは許して進ぜよう
こういう時の僕は

主観的には全能だが
客観的には全くの無能である

酒なんてキチ○イ水だよ、君
酔わないで
酔っぱらっちゃいけない

しかしよながが実に常に酔っぱらっている
という事実
対応を取ろうとするならば

己もまた酔うことになるう

対応取らなくていいんじゃないかな
そうだね、そうだよお

というわけで多少違和感ありつつも
挙動不審な僕に行く

昔、カリブで

海賊は正規軍には勝てない

どんなに強くても

強い海賊が正規軍に登用されて

さらに強くなる場合もある

昔のカリブ海では

中国では上下ひっくり返ることも

ままあったようなので

その限りではない

ときに君も僕も海賊なんだから

海賊がどうしてそんなことわかるんだよ

と突っ込まれるのを覚悟の上

殲滅^{せんめつ}される危険を少なくするよう

心掛なきやいけないよ

あとがき

この詩集は二〇二一年五月から八月の間にネットに書き飛ばしたの中から二十を選んで収めた。収録順は新しいものを先に、古いものを後にという風にしたい。というのはこの短い期間の中でも状態がどんどん悪くなっていると感じられたからだ。新しいものを後にすればより救いのない感じで詩集が閉じられることになろう。逆回しのフィルム、そんな調子の一冊だ。

他の人はもっと気安く過ごしていたかもしれない。真剣であることはしばしば陰気であるというのと同じ意味しか持たない。しかし疫禍で災難に遭われた方が大勢おられる。僕もまたわりと追い詰められたのだ。主に精神的に。経済的に追い詰められなかったのは幸いだったが、感じやすい詩人の心にこの期間は影を落とした。といってたった三ヶ月だが、三ヶ月あれば人の心が絶えるに十分。いえ、絶えてはいませんが。

そんなこんなで困難な日々も過ぎていくのだ。一切は風化していく。という具合に疫病も風化して乾いてかさぶたになりぼろっと取れて治ったらいいなと思う。

二〇二一年八月二日

多田龍介

アシンメトリー



令和三年八月三日 初版発行

著者	多田 龍介
発行者	多田 龍介
発行所	明水工房

©Ryusuke TADA 2021

